

---

# 一番近くて遠い存在

べあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一番近くて遠い存在

### 【Nコード】

N5692D

### 【作者名】

べあ

### 【あらすじ】

中学2年生の漣《漣》の好きな人は2歳年上の・・・

## 春

出会いの春・・・

何もかもが新しくて新鮮な気持ちになる  
そして別れの季節でもある春・・・

「<sup>みお</sup>零ッ!」

人目も気にせず俺の名前を大声で呼ぶ彼女

「零みてゝ??」

新しい制服似合う??」

そう言つて俺の前でくると1回つてみせる無邪気な彼女

去年まで一緒だった制服も今年から彼女は高校生

それにしても、スカートが短い

少ししゃがむとパンツが見えてしまいそうだし  
しかも、今日の彼女は一段と化粧が濃い

俺は、いつも彼女の化粧が気に入らない

目の周りを黒くしたり、ファンデーションを塗ったくったり

彼女は、そんな事しなくても充分すぎるほど可愛い

大きな目に透き通るような白い肌そしていつもシャンプーの香り

「似合う似合う」

俺は、そう言っただけで彼女を電車に無理矢理押す

こんな短いスカート誰にも見せなくなかったから端に彼女を寄せる

俺と彼女は毎日一緒に登校してきた

だが、今日から彼女とは別々の駅で下りなければならぬ

電車がこのまま止まればいいのに・・・

なんて有り得ない事思いながら彼女を見つめる

俺の視線に気が付いた彼女は、不思議そうにしながらもにこっと笑う

俺は、彼女が好きだ・・・

その気持ちに気づいたのは多分小6の夏だったと思う

蒸し暑い夏の日

その日俺は掃除当番でいつもより遅い帰宅時間だった

友達と遊ぶ約束をしていた俺は帰道を急いだ

そんな時だった、

近くの公園で錆びた音を響かせながらブランコにのっている少女

俺は、最初は誰か分かったがすぐに彼女だと気が付いた

彼女はあの時涙を流していた・・・

そんな彼女に歩み寄ってやれなかった自分

心から情けないと思った

そして、

あの小さな彼女をこの手で守りたいと思った

彼女の名前は

奥谷 藍<sup>あい</sup>

俺と彼女の歳の差は2歳

その2歳は、俺にとっては大きな差を感じさせた

大人な藍

ガキな俺

早く大人になつて藍を守るような男になりたい

この頃からそれだけをずっと願ってきた事だった

「零駅着いたよ?。」

藍の声で現実世界へと引きも出される俺

もうそこは、俺が通う中学校の近くの駅

彼女と過ごせる時間もここで終わり

寂しさを必死に堪え

「ばいばい」

と俺は彼女の頭を撫でる

微かにシャンプーの香りがした

いつもその香りをかぐと彼女を抱きしめたくなる

それを必死に抑えて彼女に背を向ける

彼女の電車が発車するのを見届けて

俺は、彼女の頭を撫でた右手にキスをした

「俺、こんなキャラだっけ？」

苦笑いしながら独りで呟く俺

そして、今日もダルい一日が始まる・・・



## 保健室

ガラッ・・・

俺はダルそうに教室に入っていく

それぞれみんな話をしたり立ち歩いてふざけたり  
いつも変わらない光景だった

俺はそんな今の和やかな雰囲気が好きだった

そんな中

「漣くん来たわよッ／＼／」

女子生徒のグループがこちらを見ているのが分かる

最近やたら俺に話しかけてくる女子グループだ

好きなタイプやら  
彼女いるのかやら

俺が何かを答える度にキャーだとかカッコいい！だとか

俺が苦手なタイプの女子達

「おはよゝ漣ッ」

そんな時俺の視界に入ってくるやたら身長のカイ男



彼の名は

斉藤 直樹

野球部のエースで女子にもそれなりにモテている

「おゝ直樹朝からデカいな」

なんておどけてみせるがコイツが俺の一番の親友だ

「そーだあ漣？」

なんか女子達が漣に放課後話があるってー」

ニヤニヤとしながら俺の方を見てくる直樹

大体話の内容は、聞かなくても分かる

俺は、別にナルシストって訳では、ないが

まあまあ異性にはモテている方だと思う

多分今まで合わせるとクラスの大半には告白をされた事があると思う

だが、俺は付き合っただとか別れただとか問題になるのが嫌で告白はほとんど断っている

「漣もいい加減彼女の1人や2人ぐらいつくれよ」

直樹は1年前から付き合っている彼女とは今でも順調らしい

少しそんな直樹を羨ましいと思う気持ちもあるが

俺は藍が好きだから女の子たちの気持ちは受け取れない

たとえその恋が叶わない恋だと知っていても……

俺は、直樹に苦笑いを向けて席を立つ

「おっおい!!」

遷何処行くんだよ? もー先生来ちゃうぞ?」

俺は、一瞬立ち止まって直樹に向かいピースをしながら

「保健室」

とだけ、吐いて教室を出て行った

俺は、寂しい気持ちになったりイライラした時保健室に逃げ込む習性があるらしい

自慢じゃないけど、この学校内で一番保健室への来客数が多いのは間違えなく大差で俺だと思う

保健室の前の階段は、創立76年の古い校舎のカビ臭い匂いと

最近塗りなおしたらしいペンキの匂いが混じって嫌な匂いがする

その匂いを俺は、大体毎日嗅いでいる

建てつけの悪いドアを力ずくでこじあけ俺は保健室へ入る

「センサーいねえじゃん……」

多分また、職員室でお茶でも飲んでるのだろう

俺は、お気に入りのいつもの一番窓側のベッドへと寝そべった

授業開始のチャイムが聞える

保健室の隣の技術室からなにやら木を切る音が保健室に響き渡る

中学校なんてどうでも良かった

毎日学校に来る理由が無くなったからだ

前までなら、藍が居たから藍の顔が見たい一心で学校に来ていた

けど今は、俺には、何も残っていない

ゆうならば、唯一の些細な楽しみは直樹の惚気のろけを聞く事と放課後の部活ぐらいだ

「藍……ッ」

藍は、今頃何をしているんだろう……??

変な男に捕まったりしていないか

藍を泣かされたりした日には、多分俺は正気ではいられなくなるだろう

正直俺は、自分が怖い……

今にでも藍をめちゃくちやにしそう

日に日に歯止めが利かなくなる

そんな事しては、絶対いけない

だって俺と藍は………

ガラッ　！！

勢いよく開いたドアに俺は、びっくりしてベッドから飛び起きた

そこに立っていた一人の女子生徒は今朝騒いでいたグループの一人だった

彼女の名前は、確か

川村　沙織

「どうしたの川村サン？」

俺がたずねると彼女は顔を真っ赤にして俯いた

「のっ……あのっ／＼／」

もじもじとこちらの様子を伺って見てくる

じれったい・・・

早く言うなら言ってしまえばいいのに

イライラを抑えながら目の前の女子生徒に作り笑いを向けた

## 兄弟

「あのツ……./

漣君って……

彼女いないんだよね ツ……?？」

また、あの質問だ

確か昨日も同じ質問をされた記憶がある

漣は、気づかれないよう小さく溜息を漏らし

いつもの、作り笑いを浮かべ女子生徒に向かって微笑む

その笑顔を見た瞬間目の前の女子生徒は

パアツと明るい笑顔を漣に向けた

どうやら、漣の笑顔から勝手に彼女はいないと解釈したらしい

事実はないんだけど……

外から校門近くに咲いている桜が見える

保健室は、漣が知っている中で一番綺麗に桜が見える場所だ

外ばかりを見ている漣に女子生徒は面白くないとゆう顔をして漣の注意を引こうとする

「桜好きなの？」

普段女子には、優しい漑だけれども桜を前にしては別だ

目の前で頑張って自分に話しかけている女子生徒などお構い無しに桜に見とれている

無視を続けて数分漑は、我に返りまた女子生徒の方に目を向ける

「え・・・とごめんなんだっけ・・・？」

漑は、面倒くさい事が一番嫌いだっただから今まで女子の告白も丁寧に断ってきた

変なフリ方をして後から、女子に騒がれるのがとても面倒くさかったからだ

今日は、どんな断り方をしようと考えたときだった

「漑君好きな人って藍サン・・・??」

思わぬ言葉にビックリして大きく目を見開いて女子生徒を見る漑

何故秘密がばれたのだろうか?? 誰にも言っていない筈なのに・・・

「やっぱり・・・本当なんだ・・・」

今日ね、実は見ちゃったの漑君が藍サンを撫でた方に手にキスしているの」

漑を見上げる女子生徒の目は、少し涙によって潤んでいた

「ちつちがッ・・・!!!」

今まで何事にもクールな漑が必死で弁解する姿を見て女子生徒は、  
本当なんだと直感した

「私じゃ駄目ですか・・・??」

真剣な表情を向ける一人の女子に漑は、戸惑った

ここで断ればこの女子生徒は、俺が藍の事を好きな事をバラしかね  
ない

そんな事が藍の耳に入れば藍は何て言うだろう・・・??

俺たちは、絶対結ばれてはいけない

いや、結ばれることが絶対有り得ないのだ

「兄弟なんですよ?」

俺の一番嫌いな言葉が目の中の女子生徒の口から漏れる

兄弟・・・

その言葉に俺は、何年も苦しめられてきた

何故兄弟は、結ばれてはならないのか?

どんな男より藍を幸せにする自信が漑にはあった



そう、俺と藍は血の繋がった兄弟

「……………」

漣は目の前の女子生から目を逸らして必死に悲しみを堪えた

「アタシなら、漣君をそんな顔にさせないよ……………」

漣の弱味を握ったからか女子生徒は普段とは雰囲気は、全く違った

漣の学ランのボタンに手を掛ける沙織

一瞬漣は、目を見開き驚いたが、拒む気力も無く沙織に自分の身を任せた

「藍サンとは、もうこうゆう事したの……………」

漣の体を漣のお気に入り窓側のベッドに押し倒し、悲しい目で見つめる沙織

無表情で首を横に振る漣

絶対藍にそんな事が出来るはずがない、漣にとって藍は、純粹で綺麗なモノだった

そんな純粹で綺麗な藍を漣は自分の手で汚してしまいそうでも臆病になっていた漣

藍を抱きたいと思えば思うほど歯止めが利かなくなつて

その度に、そこらの名前もしらない女と藍を重ねては、体を重ねてきた

女を藍と重ねて抱いた後の自己嫌悪と罪悪感からいつしか滲は、自分  
分は汚れているという感情が心の奥に植えつけられた

## 処女

漣の上半身から学ランを脱がせた沙織は、漣を前にして優越感に浸っていた

今まで高嶺の花で話もろくに掛けられなかった漣がたとえ今だけでも真っ直ぐ自分を見てくれている

沙織は、1回限りの関係で充分だった、漣の好きな人はお姉さんで自分では、とても叶わないと思ったからだ

「センサー来たらどーすんの？」

今までの漣とは、まるで別人のような低い声に無表情な顔

「先生なら、今職員室でお客さんと話してるから2時間目まで来ないわ」

沙織は、それを知っていて漣を追いかけて保健室まで追いかけてきたのだ

「ふーん」

また、あの冷たい表情を沙織に向け抵抗もせずただ沙織を見つめる漣  
漣の首筋に唇の角度を何度を変え、漣の少し焼けた肌に吸い付く沙織  
まったく抵抗もせずまるで、人形のように黙っている漣に沙織は少し罪悪感を覚えた

下のズボンに手を掛けようとした時だった

「手震えてる・・・」

処女なの・・・??」

沙織の顔は、一瞬にして真っ赤に染まった

ガタガタと震える体を抑えて再び澪のズボンのチャックに手を掛けようとするが

怖くて、それ以上手が動かない・・・

そんな沙織の姿を見て澪は

「初めてをそんな簡単に捨てちゃ駄目だよ」

とだけ吐いてベッドから飛び起き脱がされた服を着始めた

沙織は、口を開くことすら出来なくなっていた

「ん、じゃ・・・そろそろ藍入学式終わる頃だから」

手をひらひらと沙織に向かって振る澪に向かって

「バツバラしても良いのツ・・・??!!」

とやっと口が開くようになった沙織は叫んだ

藍にだけ向けるあの優しい笑顔を一瞬見せた澪は

「バラしたきゃバラせば？」

とだけ吐いてドアを閉めた

## 渡邊センサー

校門の前の桜がヒラヒラと漑の目の前に落ちる

漑は、鞆を教室に残したまま帰る事にした

直樹に後でメールして鞆とってきてもらおう・・・

ケータイのディスプレイを見ると9時30分を示していた

冷たくなった手をポケットに突っ込み駅へと向かう漑

確か11時に終わると言っていたはずだから・・・と漑は、電車表を開く

藍の通っている私立高までは、電車とバスを使って20分程度で付くが

漑にとってその20分間は何十倍も何百倍も長く感じた

「電車が来るまであと10分もあんのかよ・・・」

イライラしながらも時計を睨みつつける足が小刻みに一定のリズムで刻んでいく

そんな時だった・・・

「おー漑じゃーんー!!」

遠くからでも分かるような目立つ赤茶の髪の方が、向かって手を振ってくる

その後ろには、何人ものチンピラを引き連れている

「レン久しぶり」

澪は、その男の肩に手をまわし無造作に立てられた髪をくしゃくしゃと撫でる

「つか、澪お前その格好中学生だった訳??」

見下すようにニヤニヤと澪に向かって怪しげな笑みを浮かべる男

そもそも、澪と彼があったのは、澪が中学に入学してまだ間もない頃だった……

\*\*\*\*\*

「こら、奥谷何処へ行くんだッ!!!!!!」

一人の教師が澪に向かって叫ぶ

「オメーに関係ねえだろ……」

入学そうそう全学年の先生に目をつけられていた澪は、毎日教師と

喧嘩の日々に明け暮れていた

漣は、小柄な方だが喧嘩は、誰にも負けた事が無かった

高校生、社会人でさえも漣に傷をつけられる者はおそらく今まで1人もいなかっただろう

漣は、こんな毎日を送っていたが、学校を休んだ事は、1度も無かった

どんなに熱がでようと、どんなにダルくても

漣は、毎朝一人の女の為にだけ早起きし、一人の女だけの為につまらない学校に来ていた

その彼女と一緒にいく通勤時間は、なんとも言えぬ幸福感で漣にとってはたった一瞬のように毎朝終わってしまったていた

漣は、毎日きちんと学校には来ていたが、いつも途中で帰っていた

「今日はサボらせないぞ！！奥谷席に着けッ！！」

その日は、一段と粘り強かった社会の渡邊

いつもは、帰らせまいと頑張るもののいつも漣には勝てなかった

小柄な漣とは、対照的にいつも着ている青い無メーカーのジャージが張り裂けそのの渡邊体を見ていつも噴出しそうになる漣

今日に限っては、かなりケツにジャージがめり込んでいて笑いを堪



えるのに必死だった

しかし、漣にとってこの教師と張り合う時間が案外楽しみだったりもする

今日は、一段としつこく漣の右手を離さなかった

漣は、その社会のデブ教師に向かって

「センサーさよーなら、みなさんさよーなら」

とよくいる幼稚園児のマネをして、ダッシュで教室を出た

いつものように走って追いかけてくる渡邊だがいつも途中で息を切らし同じ台詞を言う

「明日もちゃんと学校来いよ！！！！！」

叫びながらも渡邊はいつも優しい笑顔で漣を見送る

そして、漣もそんな渡邊の表情を思い浮かべながら少し口元を緩ませた

## レン

漣は、学校を後にして駅へと向かう

行き先も何のにいつもぶらりと何処かへ出かける漣

誰も居ない静かな場所を漣は、いつも捜し求めている

大抵漣が買い物などに出かけると覚えの無い女が馴れ馴れしく漣に付きまとったり

知らない奴に写真を勝手に撮られたりなど面倒臭い事が沢山待ち構えている

適当に電車に乗り適当にバスに乗って着いた所は、町外れにある海だった

もう夕日が沈みかけていて辺りは、オレンジ色に染まっていた

そんな時海を一人で眺めている漣に向かって

話しかけてきた、いかにも不良という言葉が似合いそうな男がレンだった

レンの親は、結構名の知れたヤクザでレンが後を継ぐことになっていた

しかし、レンは後を継ぐ気などまったく無く遊び呆けていた

俺に適う奴なんて居ない……

自分の腕に相当自信のあったレンは、ある時漣の噂を聞いた

『無敵の漣』

などとう誰かがつけたダサイキャッチフレーズの漣とゆう男を見てみたいと思っていた

写真を見ると喧嘩などというような言葉が最も不似合いそうな整った顔の男だった

漣の噂は、喧嘩だけでは無く女遊びの漣でも有名だった

漣と1回寝た女は、漣が与える快感の虜になる

そんな漣と1度でいいから拳を交えたい

そしてその日レンは、草を買いに行こうとコンビニへ向かった

レンの目に海を見つめている小柄な男が目に入ったまさしく漣だった

レンは、歩きづらい砂浜の上をおもいつきり走った

そして、レンは漣の肩に手を掛け

「お前奥谷 漣？」

といかにも不良っぽいドスの聞いた声で尋ねた

「そうだけど？」

無表情の奥に不気味な笑みを浮かべ見下すようにレンを見る漑

「何だよ、その目は」

この台詞を言えば大抵の奴等がレンの前から走り去っていくが漑は、違った

にこやかに微笑むかと思うと次の瞬間

ゴスッ！！！！

鈍い音がレンの耳に聞えた

そして、鋭い痛みが下腹部に走った

「ううつ・・・」

この瞬間生まれて初めてレンは負けを知った

レンの下腹部に一撃を食らわせたのは漑の利き手右手では無く左手だった

手加減された・・・？

どんな人よりもプライドの高いレンはものすごい屈辱感をつけた

「あんたが・・・レン？」

自分の名前を呼ばれ少し驚くレン

「俺の事知ってんだ」

下腹部が痛くてレンは、うずくまるような格好で漑を見上げた

「アンタ有名なヤクザの後継者なんだろ？」

プライドの高いレンをきずかってなのか漑は、そこみ座り込みレンと同じ高さの目線にした

「ははは、そんな有名なヤクザの後継者が自分の前で蹲ってるんだからさぞ面白いだろうな」

睨み付けるように漑をじっと見つめるが漑は

「アンタちゃんと親父さんの後継いで立派なヤクザになれよ  
そんな時は、本気で相手してやるよ」

そう漑は悪戯っぽく子供のような笑みをレンに向けるとレンに背を  
向け歩き始めた

## 右拳

レンは、澪に出会ってから父の後を継ぐ事を決意し、

今となつては、レンは見違える程成長し、何十人いや、何百人の手  
下を従えるようになった

「おい、澪あの時の約束まさか、忘れてねーだーろーな」

学生服姿の澪を馬鹿にするような目でニヤニヤと不気味に笑うレン

「レンと違って俺は忙しい人なんだよ」

澪は、そう言うレンの下腹部にパンチを喰らわせた

今度は、左手では無く澪の利き手の右手だった

「相変わらず、いいパンチ持ってんじゃねえか」

そう言うレンは、澪の横腹へ拳を突いた

目を細めて今まで見せないような笑顔で笑うレンを見て、後ろにい  
た大勢のチンピラ達は、啞然とし声も出なかった

「レンこそ、立派になったじゃん」

あの時澪の左手でパンチされただけでも、レンは蹲っていたのに  
今となつては、逆に澪の横腹に一撃を喰らわすまでになっていた

2人は、目を合わせると人目も気にせず大笑いした

そんな時、一人の大男がレンたちの目の前で

「レンさんそろそろお時間では??」

と時計を見ながらレンを急かした

「ああ、もうそんな時間か？」

漑は、これからどうすんだよ」

漑は近くにあった駅の時計を見た、錆び付いて汚れた時計は10時30分をさしていた

「どっか行くんなら車で送って行くよ」

藍の学校が終わるのはあと30分後、今から電車とバスで行っても間に合わないので

漑はレンの車に乗っていくことにした

さすがヤクザともあってフェラーリのF430B10 Fuel良  
い車を持っていた

「女にでも会いに行くのか？」

またあのニヤニヤと不気味な笑顔で漑を見るレオ

「まあな。」

ぶつきらばうに答え窓の外に目をやる漑

だが、レオは気づいていた漑の真っ赤になった顔を

経験豊富な漑だが藍に関するとなると小学生のガキのような態度になってしまう漑

現に今藍の事を思い出しただけで真っ赤になるのだから、

そんな子供らしい漑の姿を見てレンは、やっぱりまだ漑は中坊なんだなと感じた

キキイツ・・・！！

レオが、急ブレーキを踏むとシートベルトをしていなかった漑は危なくガラスにぶつかりそうになった

「漑、着いたぞ」

目の前には、藍が今日から通うことになった私立高校

携帯のディスプレイを見るとまだ、11時ちょっと前で誰一人外に出ている者は、居なかった

「じゃあ、俺もう行くから」

レンはそう言うのと車に乗り込み行ってしまった

「相変わらず素っ気無え奴」



物凄いスピードで走り去っていく車を見て苦笑いする漣

漣は、校門の前で藍が出てくるのを待つことにした

何分かして、ちらほらと人が校舎から出てきた

学生服で整った顔をしている漣は、とにかく目立ち

中には、携帯を漣に向け何枚も写真を撮り騒いでいる女子生徒の姿もあった

なかなか藍がでてこないのでも漣は、しびれを切らして校舎の中に乗り込んだ

中学校とは、全然比べ物にならない程広い校舎

藍の姿は、何処にも見えなかった

本当は、突然行って藍にビックリさせてやろうと思ったが

漣は、計画を変更し、藍に電話を掛ける事にした

2回目のコールが鳴り終わった時

『漣……？なんで漣が此処に居るの……？』

漣が顔を上げると携帯を耳にあて啞然としている藍の姿

「藍そんな所にいたのか、探したんだぞ？」

藍に近づきいつものように髪を撫でようと右手を差し伸べた瞬間

パチンツ！！

校舎に響き渡る鋭い音

漑は、呆然とした

授業を抜け出してまで藍の為に此处まで来のに漑は、藍の喜ぶ姿さ  
え想像していたのに・・・

「今普通だつたら、授業やつてるはずでしょ?!?!?!  
なんで漑が此处にいるのよ!?!?!」

人目も気にせず取り乱す藍に漑は、ショックを隠し切れなかった

## 最終話

「こんな事してアタシが喜ぶと思った？」

澪は、ギョツとした

藍の大きな瞳には、大粒の涙が浮かんでいる

小学生だったあの頃俺は、藍にもう泣かせたくない・・・  
藍を守りたい、と思い藍を守ってきたつもりだった

しかし、今藍が泣いているのは間違えなく俺自信のせいだ・・・

「澪には、ちゃんと学校行って、高校にも行って欲しい・・・」

藍に此处まで心配を掛けさせていた自分が物凄く情けなく思えた

「藍・・・ごめんな・・・俺ちゃんと学校行くから・・・もう泣かないで・・・」

優しく藍を撫で澪は、藍に背を向け歩いていった

\*\*\*\*\*

「奥谷は、また学校をサボったのか?!」

その頃学校では、職員室で大騒ぎになっていた

「生徒の情報によりますと、1時間目から保健室に行くと言ったきり……」

教師全員が、またかとも言うように呆れた顔をする

「校長、教育委員会にこの事がバレたら、我高の信頼はガタ落ちです」

同級生の親からも何度も抗議の声が挙がってきて教師たちも頭を悩ましていた

そんな中

ガラッ……！！！！

そこには、教師達の悩みの種

澪が立っていた

「奥谷ッ！！！貴様何処に行つてたんだ！！！」

学年生徒指導部の山岸が大声を張り上げる

「すみませんでした。」

教師全員がぎょっとしながら澪の方を見る

あの、学校創立以来の問題児奥谷澪が頭を下げ謝罪をしている

びっくりして、コーヒーを噴出す教師もいた

「……ッ……わ……分かったから……授業に戻れ」

焦りながら澪に頭を上げさす教師達

それから澪は職員室を後にし、3階にある教室に向かって歩いた

4時間目は、ちょうど社会で、渡邊が黒板に顔に似合わず綺麗な字を書いている時だった

ガラッ・・

堂々と前のドアから教室に入っていく澪に生徒全員が啞然とする

沙織は、朝自分がした事を思い出し澪から顔を背けた

社会の渡邊もその光景を見て、ビックリしたがまた、あの優しい笑顔で澪を受け入れた

「奥谷ー早く自分の席着けー」

そう言うとき渡邊はまた黒板に向かい字を書き始める

窓に目をやると、桜が咲いていた、いつも保健室から見る桜とは、また違う風景で

とっても、とっても綺麗だった……

学校には、来たものの便勉強道具なんて物を持って来ていない漑は、外の桜に見とれていた

そんな時、漑の制服のポケットから振動がくる

ポケットから携帯を出し渡邊にバレないよう慎重に携帯を開く

藍からのメールだった

漑、ちゃんと授業受けなさいよ！！！！

漑の行動を見透かしたようにきた藍からのメールに漑は、プツと笑った

しかたないので漑は、隣の席の人からノートとシャーペンを借りた

桜が綺麗に咲き誇り全ての物がキラキラと綺麗に見える春

春が来て夏が来て秋が来て冬が来て、そしてまた、春が来る

今は、まだガキで藍に迷惑を掛けてしまう俺

けど、いつか絶対彼女を俺の手で俺だけの女にしてやる

だから、今からでも覚悟しとけ？

澪は、そう打ったメールを未送信ボックスに保存した

携帯をしまつと澪は黒板の字をせっせと写し始めた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5692d/>

---

一番近くて遠い存在

2010年12月9日05時06分発行